

二〇一五年三月二二日 主日礼拝説教要旨

シリーズ・信仰の父アブラハム^①

インマヌエルの神に祈る

(創世記二一・二二〜三四)

二〇一二年二月、全米に衝撃が走った。身長一九一センチ、中国系アメリカ人、ハーバード卒、ドラフト外入団のほぼ無名のNBA(プロバスケットボール)選手が、二メートルをゆうに超える選手達に突進、次々に得点したのだ。二五、二八、二三点と活躍した四試合目は何と三八点の大爆発。アナウンサーはこう叫んだ。「ジェレミー・リン、全く無名だった男です。」この神がかり的な活躍が彼に一つのあだ名をつけた。「リンの狂気(Ulin-Sanity)」である。今朝のテキストはある意味神がかりのアブラハムの人生を見た異邦の王アビメレクが「何をしても神はあなたと共におられる。」と言いながら彼と契約を結ぶシーンであるが、ここから神について二つ、そして神と共に生きる人について一つ、合計三つの事を学んでみたい。

一、どこにいても共にいる神

アブラハムの生涯は、その召し出しの記事の強烈な印象のゆえに、全てが約束

の地、カナンで起こっているように思いがちだ。だが現実には違う。アブラハムは相対的な年数を約束の地の外で過ごしており、この箇所もその一つである。詩篇一〇五篇はこのアブラハムの旅についてよく知っており、「彼らは、国から国へ、一つの王国から他の民へと渡り歩いた(一一三)」と書いてある。しかし続く一四節には「しかし主は、だれにも彼らをしいたげさせず、かえつて彼らのために王たちを責められた」とある。ここから解することは、アブラハムはそのような「寄留者」としての生活を余儀なくされていたが、そのような状況下にあつてもなお神はいつも彼と共にいられたということである。神はご自身が契約を結んだ民がどこに行っても、いつも彼らと共におられる誠実なお方なのである。

二、何をしても共にいる神

二二節にはゲラルの王アビメレクとその將軍ピコルが「あなたが何をしても、神はあなたとともに居られる。」と言ったことが書かれているが、この言葉の裏側にはアビメレクの複雑な感情がある。というのも先にアビメレクはアブラハムの方便、即ちサラを自分の妹だということばによって危うく死にかけているからである。アビメレクは神なき異邦の王であつたが、少なくともこの件においては責めを負わされ

るべきことは全くなかつた。しかし彼はアブラハムの神とその偉大な力の前に屈服し、方便をいって自らを欺こうとしたアブラハムに祈りを乞うて祝福を返してもらつた。だから彼にしてみれば「なぜ神はそのような狡猾な人間と共に居られるのだろうか」という思いがあつたらう。しかし彼はその疑問を越えてアブラハムと契約を結んだ。その結果彼はアブラハムを祝福する者に与えられる祝福に与つたのである。(参：創一一・三)

三、その場所で神に祈る人

互いに真実であることを誓い合った後、アブラハムは間髪いれず具体的なアジエンダを持ち出した。それは先にアビメレクのしもべたちが奪つた井戸を返せというものであつた。砂漠の民にとつて、井戸はまさに「いのちの源」であり、往々にして争いに発展する厄介な問題であつた。しかし先に誓いを立てていたこともあつたらう、アビメレクはその抗議を潔く受け入れ、アブラハムもまた羊と牛を贈つて契約を結んだ。約束を口約束にせず、誠実に履行したのだ。更にアブラハムは一連の行為が終わった後、記念の木を植え、祈りを捧げたと正直称賛できないものも数多くある。しかし彼が全能の神、主の臨在の中に

生き、人生の節目において主の名を呼び、祈りの中で主の業を記念していたことは間違いなく信仰の模範である。更に言えば彼は祈りによつて、共に居られる主をより深く知つた人物であり、この祈りによつて彼の信仰は強化されたとも言えるのだ。

* * *

「リンの狂気」によつて一躍スターダムに躍り出たジェレミーを待ちうけていたのはスタンディング・オベーションだけではなかつた。「Chink in the Armor」(鎧をまとつた中国野郎)という見出しが有名スポーツ専門のウェブサイトに踊つたのだ。「Chink」は日本人に「Jap」というのと同じこと。卑劣な人種差別のターゲットにされたのだ。しかし彼は屈せず、なお得点を積み上げた。反対にこれを書いた記者は人権団体から批判を受け、謝罪の末、失職した。ある記者がこのことをリンに尋ねるとリンはこう言つた。「彼らは謝罪したんだ。もう気にしてないよ。」さすがいいではないか。彼はいう。「僕は苦境の中でも毎日祈りを捧げ、神に身を委ね、自由を得た。」神は確かに信仰者が何をしても、どこにいても共にいるお方だ。しかしそれに気づくかどうかは、その人の祈り次第である。信仰の父アブラハムは祈つた友よ、あなたはどうか。